

〈原著論文〉

大正末から昭和初期の家庭洋裁における子供の簡単服

Kantan-fuku for Children and the Home Tailoring of Western-style Clothes
from the Late Taisho to the Early Showa Era

藤本 純子
(Junko FUJIMOTO)

Abstract : The purpose of this study is to gain a specific understanding of the characteristics of *Kantan-fuku* for children, and to discuss its impact on everyday clothing life during the transition from Japanese-style to Western-style clothing. *Kantan-fuku* means simple clothes ; it is the basic line of the original pattern for clothing. Through analysis of illustrations and text on *Kantan-fuku from four books on how to make children's clothes in the Shufu no Tomo* "Jitsuyō hyakka sōsho" series, published from the end of the Taisho era to the beginning of the Showa era, the characteristics of items, shapes, and composition were investigated. In addition, it was found that one type of *Kantan-fuku dress* was made according to the explanations in the materials, reproducing the shape of the tailoring. *Kantan-fuku* largely consists of dresses for girls in summer. These are loose and easy to move, but lack the beauty of the three-dimensional shapes typical of Western clothing. The pattern was more similar to the composition of Japanese clothing than Western clothing. While making use of previous sewing experience, Japanese housewives unfamiliar with Western tailoring could take on the challenge easily. In an age when most children's clothing was sewn at home, the introduction of *Kantan-fuku* was an opportunity to promote the Westernization of everyday clothes.

Key words : *Kantan-fuku*, Western-style clothes making, children's clothes, late Taisho era, early Showa era

はじめに

1. 研究の背景と目的

日本での洋服の導入は明治初期の国家的な近代化政策を背景に推し進められ、公的な意味合いの強い衣服における洋装化が中心であった。一般の人々の日常着としての洋服が衣生活の中に定着するのは第二次世界大戦後のことである。その間、明治半ばに活動的な衣服の改良が唱えられはじめ、1923（大正12）年の関東大震災の後には合理的・機能的な衣生活を目指す動きが活発化し、

男性に比べ遅れていた子供や女性の洋装化が試みられた。当時は家庭での裁縫によって日常着が賅われており、生活に根ざした新たな衣服の導入・定着には、家庭での洋服作りの普及が不可欠であったものと考えられる。明治末期には子供の洋服の作り方を詳述する洋裁書の発行が見られる^{1,2)}。また、明治30年代以降に相次いで創刊される婦人雑誌には、洋裁に関する記事が掲載され、家庭における主婦の洋裁技術の向上に役立ったものと思われる。

初期の婦人雑誌の洋裁記事は子供服に関するものが多いが、実用的な記事が多い婦人雑誌「主婦之友」を出版した主婦の友社は、1926（大正15）年より『主婦之友

『實用百科叢書』シリーズの中で4編の子供服の洋裁書を刊行している。各編では、洋服と和服の相違点として型紙の有無をあげ、型紙の基礎線となる洋服の根本の型として「原型」と「簡単服」を示し、製図方法の説明を掲載している。原型は、曲線の衿ぐりと袖ぐりおよび傾斜した肩線の前後身頃の構成である。同様の原型が同年の『主婦之友』³⁾に文化裁縫女学校（現在の文化服装学院）の並木伊三郎考案のものとして紹介されており、現代に続く「文化式原型」の初期の型であると考えられる。一方、簡単服は前後の身頃および袖が繋がった一続きの構成で直線的な形である。現在の洋裁の一般的な型としては見ることのない構成であり、洋裁導入期の特異な製図法ではないかと思われる。本稿では、『主婦之友實用百科叢書』において取り上げられた根本の型のうち、現在では用いることのない簡単服の製図や応用例の実際について検討する。

「簡単服」に着目した先行研究としては、戸栗⁴⁾、中込⁵⁾が婦人既製服を中心に簡単服と称された簡易な衣服の系譜や導入の背景を論じている。中込は子供の簡単服についても触れているが、そこでは裁ち方に製図を用いないキモノスリーブの貫頭衣型の衣服と捉えている。また、日本の洋裁における型紙の発達過程については、原型の製図法や学校教育の教科書や教材を資料とする研究^{6,7)}が多い。子供服の製図の型としての簡単服に関する検討は、充分になされているとは言えない。本稿では、大正末から昭和初期の家庭洋裁における型としての簡単服について、製図や裁断、縫製、デザインについて検討し、特徴を明らかにする。そして子供の簡単服の実際的な検討を通して、和装から洋装への過渡期の衣生活に及ぼす簡単服の影響について考察する。

2. 研究方法

資料としては大正末期から昭和初期に主婦の友社より発行された『主婦之友實用百科叢書』に所収された子供服の作り方に関する4編の書籍を用いる。第八篇『夏の男児洋服の作り方』⁸⁾、第九篇『夏の女児洋服の作り方』⁹⁾、第三十篇『冬の女児洋服の作り方』¹⁰⁾、第卅一篇『冬の男児洋服の作り方』¹¹⁾である。

まず、資料に掲載された簡単服の作り方の解説とスタイル画、型紙や裁断図を読み解き、簡単服の服種やデザインの傾向、および構成方法を把握する。また、資料の記載に基づいて簡単服の基礎線の作図をおこない、身頃の型紙作りの実際を確認する。さらに資料にその応用として紹介されている簡単服のワンピースドレスを解説に

従って作図、裁断、縫製して実物制作する。再現した仕立て上がりの形状を観察し、シルエットやフィット感などの三次元の特徴について検討する。

3. 資料『主婦之友實用百科叢書』について

明治30年代以降には婦人雑誌が盛んに発行され、一般の人々の生活に影響を及ぼした。『婦人画報』（1905.7創刊、近時画報社）、『婦人之友』（1908.1創刊、婦人之友社）、『婦女界』（1910.3創刊、同文館）等、婦人雑誌の発行が相次ぐ中、資料の発行元出版社である主婦の友社より、1917（大正6）年に『主婦之友』が創刊される。『主婦之友』は、当時すでに発行されていた婦人雑誌よりも安価な価格設定により発行部数を伸ばし、家庭生活に密着した実用的な内容で中流階級の主婦層に支持された。1924年には22万部、1930年代半ばには100万部を超える大部の発行数を誇る代表的な婦人雑誌であった¹²⁾。

本稿の資料とした『主婦之友實用百科叢書』各編の巻頭には「生活上必要な知識を、確実に、そして手取り早く得る方法として（中略）婦人や家庭の生活に缺くことのできぬ實際的知識を、雑誌『主婦之友』の編輯と同じやうに、確實、親切、簡単を旨として、提供する」と創刊者である石川武美によって編集発行の意図が記されている。その言葉が示す通り、『主婦之友實用百科叢書』は、第二篇『毎日のお惣菜利用法』、第廿八篇『中流住宅の模範設計』、第四十三篇『病人の看護法』など生活に関わる多岐にわたるテーマを『主婦之友』の編集局の記者が執筆し、当時としては安価な60銭で販売された。

資料のうち最初に発行された『夏の男児洋服の作り方』では「子供の着物として、洋服が便利であることは、もはや少しも異論のないこと」とした上で、「子供の洋服は、もともと家庭で作るべきもの、家庭で作ってこそ、理想的のものができると述べ、「夏服から改良してゆくといふことが、気候からいつても、裁縫の練習にもよい¹³⁾と普及し始めた子供洋服を肯定的に捉え、従来のきものように家庭裁縫によって洋服作りを実践することを目指している。さらに、その翌月に発行された『夏の女児洋服の作り方』でも「これをご覧になれば、これまでむづかしいもの、一つとして思はれてゐた子供洋服も、きつとご自分の手でお仕立てになられるやうになり得ると存じます。」¹⁴⁾と洋裁初心者に向けて、家庭洋裁による子供の洋装化を促している。今和次郎の調査¹⁵⁾によると1925（大正14）年の洋服着用率は、

銀座において大人の男性は67%、女性1%、東京郊外において子供の男児は74%、女児61%であり、資料が発行された大正末から昭和初期の東京では子供の洋装はかなり普及し、一般的な衣服となりつつあった様子がうかがわれる。地方との差はあると思われるが、子供洋服の作り方は当時の中流階級の主婦にとって必要性を感じる関心事であったものと推察できる。

資料とした4篇は夏と冬の季節別の男児、女児それぞれの子供服の作り方を解説するもので、当時三六番と言われた約縦18cm、横10cmの小ぶりなサイズであるが、本文の頁数は『夏の男児洋服の作り方』107頁、『夏の女児洋服の作り方』89頁、『冬の男児洋服の作り方』117頁、『冬の女児洋服の作り方』127頁と充実している。いずれも一章で洋服を作るために必要な心得として、人体の寸法、材料や用具、基本の製図、裁断、ミシンの扱いの注意点、見返しや布端の始末方法、色の組み合わせ等の洋裁の基礎知識の解説から始まる。二章では下着の種類と作り方へと続き、洋服を導入するにあたり、下着を整えることから始めなければならなかった当時の衣生活の実情をうかがい知ることができる。そしてその後には各編の季節や性別に応じた複数のアイテムについてスタイル画を図示し、対象年齢、デザインの特徴、適した材料を解説した上で、製図および裁断方法、縫製手順等の具体的な情報を掲載し、読者が各家庭で実際に洋服作りに取り組みめるような内容としている。

結果・考察

1. 根本の型としての簡単服

4篇の資料では、洋服作りに必要な心得として、布の地質や柄によって変化を見る和服に対し、洋服は型によって変化するため、一々適当な型を考えなければならぬと説明している。ここで言う型とは衣服構成を製図したパターンのことを指し、布地に直接印を入れながら裁断する和裁との違いが強調されている。特に製図と裁断については根本の型として簡単服と原型の2種があるとし、各資料の初めの心得の中で、それらの製図法の解説に頁をさいている。簡単服とは「簡単なもので、袖、身頃を続けて裁ち、縫ひ方もまた手軽なもの」、原型とは「胴と袖とを継ぎ合わせて作るもので、応用の範囲も一層広い」型ですべてはこの二つを応用したものである¹⁶⁾としている。いずれも上半身の構成を示す基本の型であり、それらを応用することで身頃を含む様々なデザインの洋服の型紙作りの提案がなされている。

図1の右は簡単服、左は原型で、根本の二つの型の構

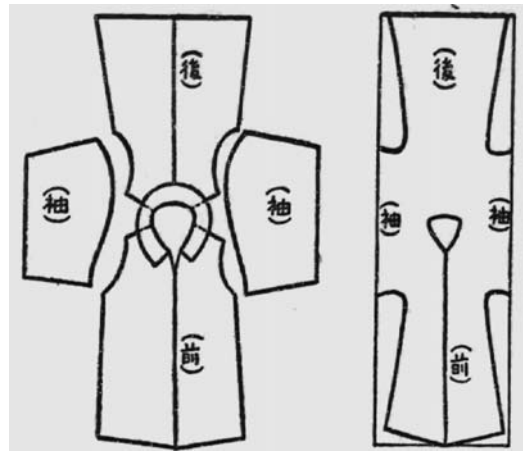


図1 原型(左)と簡単服(右)の構成

『主婦之友実用百科叢書第九篇夏の女児洋服の作り方』
主婦之友社(1926年7月)P7
洋服の根本の型である原型と簡単服の構成を示している。

成の相違を示している。図では、それぞれ衿ぐりを中心にして左右に袖、上端を裾線として後ろ身頃を逆さまに配し、中段の肩を境に正方向の前身頃が続き、下端が前身頃の裾線となっている。左の原型は、現在の洋服と同様の構成であるが、肩が傾斜した前後左右の身頃、左右の袖と複数のパーツに分かれ、袖付けが曲線で複雑である。一方、右の簡単服は、衿ぐりと肩線を中心とする前後左右の身頃、袖が一続きの十字型の構成であり、一般的な洋服の構成とは異なっていた。むしろ、前後の肩を続けて裁ち、直線的な袖付けである和裁の構成と類似している。

2. 簡単服の製図方法

簡単服の製図方法は図2のように示されている。右前の身頃および袖を示す長方形の中に、胸囲より割り出した各部の寸法に基づいて直線の基礎線を引き、上半身の形を定めている。右端は前中心線、上端は肩線にあたる。右端と上端は折り返して輪裁ちし、十字型のひと続きの型紙となる。資料には背丈の寸法から各部の寸法を割り出す年齢別の標準寸法表(図3)が示され、実際に計測をおこなわなくても洋服を作れるようになっていく。

製図の手順は次の通りである。

- ①まず右上の角から横に一寸三分、縦にその1.25倍の長さの第一基礎線を入れ、衿ぐりの目安とする。この

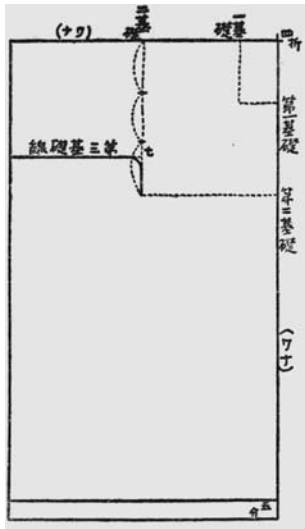


図2 简单服の基礎線

『主婦之友實用百科叢書第九篇夏の女兒洋服の作り方』主婦之友社 (1926年7月) P 12

基本の寸法は8歳の場合であり、年齢ごとに縦横共に五里ずつ増減する。

- ②第二基礎線は胸の太さおよび長さを示し、右上の角から胸囲の1/4にその4割の緩みを加えた寸法で縦、横同寸の直角線を引く。
- ③第三基礎線は袖の太さを示し、縦に引いた第二基礎線の2/3よりも七分多い位置で上端と平行な直線を引く。

このように製図して简单服の上半身の基礎線を定め、それを元に製作する衣服の形に合わせて展開していく。外回りの長方形の横幅は胸周りの寸法と袖丈、縦の長さは衣服の丈の長さとなる。製作する衣服がワンピースドレスのように丈が長い場合、裾は前身頃の丈を五分長くして腹部の膨らみをカバーするように作図する。

3. 简单服の裁断

資料では、裁ち方について洋服には正確な型紙が必要であり、布地の上にすべての型紙を配置し、縫い代を加えて裁ち落とすと解説されている。特に洋服の場合は和服と比べ、細かなパーツを数多く必要年、布の縦横の方向を揃えてすべてのパーツを裁断しなければならないと注意を促している。しかし、简单服の場合は、左右上下が対称な一枚の十字型の大きなパーツからなり、一般的な洋服の構成とは異なっている。そのため、前述のような洋服ならではの配慮は不要となる。

また、简单服の裁ち方については次の二通りの方法の記載が見られた。

①製図用紙を四つ折りにする方法

型紙を作る段階で用いる紙を四つ折りにし、右半身を作図し、4枚を重ねて型紙を作る方法である。布の上に十字形の型紙を広げて重ね、縫い代をつけて裁断する。

②用布を四つ折りにする方法

型紙は右前をベースに出来上がりの1/4にあたる部分に作図する。裁断の際に用布を縦横に四つ折りにし、4枚の重なりの上に型紙を重ねて、縫い代をつけて裁断する。

いずれの場合も、製図あるいは裁断の工程において、仕立て上がりの面積の1/4にあたる作業をおこなえばよいことになり、简单服の洋服作りの負担は軽減されて取り組みやすかったものと考えられる。

年齢	背丈	背幅	袖丈	袖幅	胸囲	胸囲差	脇幅	裾幅
一歳	六寸	二尺	九寸	九寸四分五厘	一尺二寸	六寸	一尺二寸四分	一尺二寸四分
二歳	六寸三分	一尺二寸六分	九寸	九寸四分五厘	一尺二寸四分	六寸三分	一尺二寸四分	一尺二寸四分
三歳	六寸六分	一尺三寸二分	九寸	九寸四分五厘	一尺三寸二分	六寸六分	一尺三寸二分	一尺三寸二分
四歳	六寸九分	一尺三寸八分	九寸	九寸四分五厘	一尺三寸八分	六寸九分	一尺三寸八分	一尺三寸八分
五歳	七寸二分	一尺四寸四分	九寸	九寸四分五厘	一尺四寸四分	七寸二分	一尺四寸四分	一尺四寸四分
六歳	七寸五分	一尺五寸	九寸	九寸四分五厘	一尺五寸	七寸五分	一尺五寸	一尺五寸
七歳	七寸八分	一尺五寸六分	九寸	九寸四分五厘	一尺五寸六分	七寸八分	一尺五寸六分	一尺五寸六分
八歳	八寸一分	一尺六寸二分	九寸	九寸四分五厘	一尺六寸二分	八寸一分	一尺六寸二分	一尺六寸二分
九歳	八寸四分	一尺六寸八分	九寸	九寸四分五厘	一尺六寸八分	八寸四分	一尺六寸八分	一尺六寸八分
十歳	八寸七分	一尺七寸四分	九寸	九寸四分五厘	一尺七寸四分	八寸七分	一尺七寸四分	一尺七寸四分
十一歳	九寸	一尺八寸	九寸	九寸四分五厘	一尺八寸	九寸	一尺八寸	一尺八寸
十二歳	九寸三分	一尺八寸四分	九寸	九寸四分五厘	一尺八寸四分	九寸三分	一尺八寸四分	一尺八寸四分
十三歳	九寸六分	一尺九寸	九寸	九寸四分五厘	一尺九寸	九寸六分	一尺九寸	一尺九寸
十四歳	九寸九分	一尺九寸六分	九寸	九寸四分五厘	一尺九寸六分	九寸九分	一尺九寸六分	一尺九寸六分
十五歳	一尺二分	二尺	九寸	九寸四分五厘	二尺	一尺二分	二尺	二尺

図3 標準寸法

『主婦之友實用百科叢書第九篇夏の女兒洋服の作り方』主婦之友社 (1926年7月) P 11

4. 简单服の服種

表1は各編の資料に掲載された上半身を含む洋服の点数を服種別に示している。()の数字はそのうち、袖と身頃、前身頃と後ろ身頃が肩で一続きになっている简单服の裁断図をベースとして用いていることが明らかな洋服の点数である。简单服以外の型紙は、もう一方の根本の型である原型を応用したものであるとは判断しかねるものが多く、今後検討が必要であろう。服種については、資料の目次の章立てを参考に、下着、ロンパース、ドレス、上衣、外衣に大別し、掲載数を集計した。下着に分類したものは、上半身を覆う下着としてシャツ、ウェスト、シミーズ、コンビネーションである。ロンパースはシャツとブルマ(パンツ)が一体化したもので、資料には『遊び着』とか『いたづら着』とかいつたもので、二三歳のよちよち歩き頃から七八歳までのお子さんには、大層身軽でかわいい服装¹⁷⁾というキャプションが付いていた。男女を問わず当時の夏の子供服の定番であったようで、下着やドレスとは分けて扱われていた。上衣にはブラウス、セーラー型上衣、シャツ、折襟通学服、詰襟通学服が含まれる。ドレスはワンピースドレスを指し、女兒用のアイテムであるが、デザインの変異が豊かで掲載点数は多かった。外衣はオーバーコート、マント、ケープを含む冬のアイテムである。

資料には上半身を含む型紙の事例が計62点掲載されていた。内訳は、女兒の『夏の女兒洋服の作り方』『冬の女兒洋服の作り方』各19点に対し、男兒の『夏の男兒洋服の作り方』『冬の男兒洋服の作り方』には各12点であった。そのうち、1/4にあたる15点が简单服であった。『夏の女兒洋服の作り方』では掲載されたすべてのロンパースおよび、半数のドレスが简单服の応用であり、掲載数の4割に当たる8点が简单服であった。また、『夏の男兒洋服の作り方』でも简单服のロンパースが掲載されていた。

表1 各編の服種別型紙掲載数

	夏の男兒洋服の作り方	夏の女兒洋服の作り方	冬の男兒洋服の作り方	冬の女兒洋服の作り方	計
下着	3(1)	4(0)	3(1)	4(1)*	14(3)
ロンパース	2(1)	3(3)	0(0)	0(0)	5(4)
上衣	7(1)	3(1)	6(0)	3(0)	19(2)
ドレス	0(0)	9(4)	0(0)	9(2)	18(6)
外衣	0(0)	0(0)	3(0)	3(0)	6(0)
計	12(3)	19(8)	12(1)	19(3)	62(15)

()内の数字は简单服の型紙数を示す。

*文章のみで型紙の図が示されていないシミーズ1点を含む。

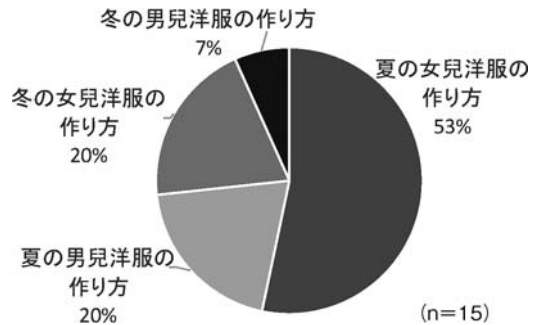


図4 編別の简单服の掲載数 (%)

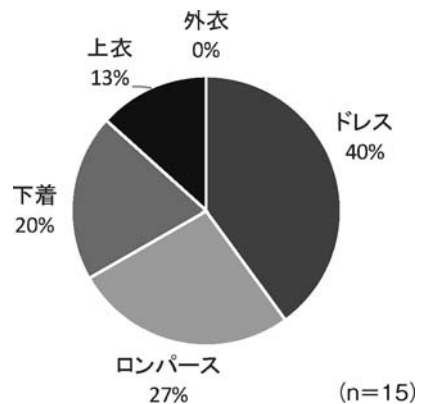


図5 掲載された简单服の服種 (%)

简单服の型紙の掲載点数について掲載書別にみると図4に示す通り、『夏の女児洋服の作り方』に全体の半数以上(53.3%)の型紙がみられた。また、『夏の女児洋服の作り方』『夏の男兒洋服の作り方』の夏の洋服を扱う2編、および『夏の女児洋服の作り方』『冬の女児洋服の作り方』の女児の洋服を扱う2編でそれぞれ7割以上を占めていた。資料での简单服は夏服、女児の洋服に用いられることが多かったと言える。

さらに简单服の服種の割合は図5の円グラフに示すように、最も多いドレス(40%)、次のロンパース(26.7%)の2アイテムで7割程度を占めていた。ドレスに分類される資料のワンピースドレスも、ロンパースも、スタイル画では体のラインが現れないゆったりとしたシルエットで描かれていた。简单服は、上下のつながったゆとりの多いワンピースタイプの服種に展開されていたことが分かる。

5. 简单服のワンピースドレスの再現

简单服の展開の最も基本的な例として掲載されている



図6 简单服の応用スタイル画
『主婦之友實用百科叢書第九篇夏の女児洋服
の作り方』主婦之友社 (1926年7月) P 13

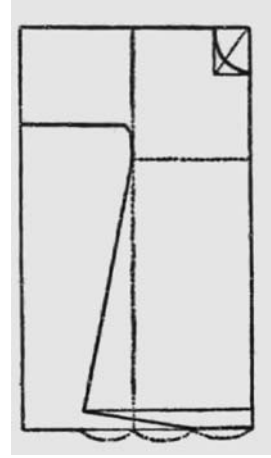


図7 简单服の応用製図
『主婦之友實用百科叢書第九篇夏の女児洋服
の作り方』主婦之友社 (1926年7月) P 13

図6に示すワンピースドレスを実際に制作し、三次元の衣服形状を再現した。简单服の基礎線の作図法の解説で基準値となっている8歳の標準寸法を用い、薄地の綿シーチングをミシン縫製により制作した。資料の寸法は鯨尺で表記されているが、1尺を37.9cmに換算して作図した。8歳の標準寸法は図3の表の値より、背丈30.7cm、衿丈46cm、胸囲・腹囲・腰廻61.4cmとした。製図に使用した寸法は、以下、鯨尺をセンチメートル(cm)に換算した値で述べる。

5-1. 型紙

前述の「2. 简单服の製図方法」の通り、資料の説明に従い、模造紙に简单服の基礎線(図2)を作図した。8歳の標準寸法を用いて第一から第三基礎線を引き、縦は背総丈63.3cm、横は衿丈45.9cmの長方形の型を作図した。ワンピースドレスの前後の差として前裾を1.8cm延長した。さらに図6のワンピースドレスへと展開した型紙とするために、図7のように、裾で胴幅の1/2を広げ、第三基礎線の角とつなぎ、斜めの脇線を作図した。衿ぐりはラウンド型とし、右上の角と第一基礎線の角をつないだ斜線の1/4を通る曲線を引いた。袖丈については明記されていなかったが、応用製図(図7)の袖丈は長いので、スタイル画(図6)に合うよう検討し、13cm短く調整した。また、後ろ中心に21.2cmのあきの印を記した。

5-2. 裁断

前述の「3. 简单服の裁断」の要領で布を裁断する。

5-1で作図した型紙を90cmの薄地の綿シーチング(生成)の上に配置し、袖下1.2cm、脇1.2cm、袖口3.8cm、裾3.8cmを縫い代として余分に残して裁断した。後ろ中心のあきとして、後ろ衿ぐりから21.2cmの切り込みを入れた。また、衿ぐりやあきを始末する際に用いる幅1.2cmのバイアステープ、縦46cm×横5cmの見返し・持ち出し布を裁断した。縫い代や別布の寸法は明示されていなかったため、各編の要所の部分的な縫製¹⁸⁻²¹⁾および類似デザインワンピースドレスの縫い方²²⁾の解説を手掛かりに、縫製や仕上がりに関して検討したうえで決定した。

直線が多く裁断しやすいが、型紙が大きく、中央で衿ぐりを切る必要があるため、四つ折りした布に型紙を配して裁断する方法(3简单服の裁断-②)が効率的であった。しかし、衿ぐりおよび裾の出来上がり線が前後で異なるため、初心者にとっては一枚の布の上に型紙を広げて作業する方法(3简单服の裁断-①)が簡単に感じるものと思われた。

5-3. 縫製

5-2で裁断した布地をミシン縫製により縫合し、ワンピースドレスを仕立てた。縫い代の始末は資料の指示通り、手縫いも用いた。縫製については、裁断時と同様、各編の要所の部分的な縫製¹⁸⁻²¹⁾および類似デザインワンピースドレスの縫い方²²⁾の解説を参照した。衿ぐりや後ろのあきは縫い代込みの型紙であり、縫製する際に加減して始末する必要があった。衿ぐりはバイアステープでくるみ、後ろ中心のあき部分は別布で持ち出しおよび

見返しを縫合して始末した。

縫製手順は次の通りである。

- ①後ろ中心のあきの始末をする。見返し・持ち出し布を2 cm の幅に折り、右身頃（上前）側の切り込みの裏側と左身頃（下前）側の布端に続けて配して縫う。見返しと持ち出しを続けて縫い、整える。
- ②前後の袖下から脇を続けてミシンで縫合する。中0.4 cm、外0.8 cm の袋縫いとす。特に袖下と脇のカーブのきつい部分は、後で伸びないように布を伸ばして縫い合わせる。
- ③袖口の縫い代を裏に三つ折りし、手縫いでまつる。
- ④裾の縫い代を裏に三つ折りし、手縫いでまつる。
- ⑤衿ぐりの裁ち端をバイアステープでくるみ、縫合して始末する。

簡単服のワンピースドレスは縫製箇所が少なく、同寸同形の布同士を直線的に縫い合わせる部分が多いため、短時間で簡単に縫製することができた。ただし、袖と脇の角の縫合、衿ぐりおよび裾等の曲線状の縫い代の始末については、微妙な手加減により調整しながら縫い進める必要があった。

5-4. 再現作品

簡単服を応用したワンピースドレスは、図8のように再現できた。8歳の標準寸法の胸囲・腹囲61.4 cm に調整した子供用ボディ（Kiuya, 130 サイズ）に着せ付けて

観察した。

仕上がりの形状は和服のように平面的であるが、ボディに着せると半袖、ラウンドネックのAラインワンピースドレスとなった。胸元から裾へ身体のラインを包み込んで十分に広がり、前後左右の裾線はまっすぐに揃い整っている。仕立上りの寸法は、胸回り約86 cm、裾回り129 cmと広く、ゆるみ分量が多い。袖下のきついカーブの脇がつり気味で、袖底の落ち着きが悪いが、袖ぐりおよび袖口回りが17 cmと広いため、着心地や動作には影響しない。また、開口部が大きく、夏は涼しく着用できると思われる。ゆとりが非常に多く動作を妨げないが、肩から袖ぐりにかけて布が弛んでしわが寄り、体にフィットせず、洋服特有の立体的に造形された美しさは感じられない。

おわりに

大正末から昭和初期に発行された『主婦之友実用百科叢書』シリーズ所収の子供服の作り方に関する4編を資料とし、子供服の製図の根本の型である簡単服に関する図や文章を抽出し、その応用服種やデザインの傾向、構成方法を把握した。また、簡単服を展開したワンピースドレスを資料の解説に従って制作し、仕立て上がりの形状を再現した。

簡単服は衿ぐりと肩線を中心に前後左右の身頃、袖が一続きの十字型の型紙であった。肩に傾斜があり、前後左右の身頃、左右の袖という曲線を含む複数のパーツか



図8 簡単服の応用ワンピースの再現作品の写真
左から正面、右側面、背面、左側面

ら成る現在の一般的な洋服の構成とは異なっていた。むしろ、和服の前後身頃が一続きで直線的な構成と類似していた。簡単服は、製図用紙や用布を四つ折りにして一度に製図あるいは裁断をおこなったり、同寸の布同士をまっすぐに縫い合わせるなど、洋裁やミシン操作に不慣れであっても取り組みやすい仕様となっていた。しかし、袖丈の長さや縫い代寸法、縫い代の始末の方法など曖昧な点や明記されていない点もあり、それまでの個々の裁縫経験を元に判断して取り組むことが必要とされていた。

子供の簡単服は、主に夏の女兒のワンピースドレスに展開された。ゆとりが非常に多く動作を妨げないが、本来の洋服の特徴である立体的なシルエットを形作ることはできず、洋服特有の美しさには欠けていた。しかし、高価な衣服を購入したり、難しい洋裁を一から学ばなくても、これまでの家庭裁縫の知識と技術を活かしながら、家庭で作ることのできる簡単服の洋服は、子供の日常に必要な活動性や経済性を満たす新しい衣服として受け入れられたものと思われる。簡単服の出現は、子供の衣生活の洋装化を推し進める契機となったと考えられる。

参考文献

- 1) 牛込ちゑ. 被服教育の変遷と発達. 家政教育者. 1971, 173-209, 326-349
- 2) 宇野保子. 明治後期の洋裁書とその周辺－明治40年代を中心として－. 中国短期大学紀要. 1993, Vol.24, 25-26
- 3) 東京家政研究会. 主婦之友. 主婦之友社. 1926, 4月号
- 4) 戸栗一美. 昭和時代初期における庶民の服装－簡単服の導入過程に関する一考察－. 静岡女子大学研究紀要. 1982, Vol.16, 75-82
- 5) 中込省三. 簡単服の系譜. 風俗. 1997, Vol.36 No.1, 2-19
- 6) 藤田恵子. 女子上半身原型作図法の変遷－原型出現から昭和20(1945)年まで－. 日本家政学会誌. 2000, Vol.51 No.5, 59-67
- 7) 田中陽子. 明治・大正期の小学校裁縫科における洋裁技術の受容－和裁への適応－. 日本家政学会誌. 1999, Vol.42 No.3, 17-23
- 8) 夏の男児洋服の作り方. 主婦の友社. 1926
- 9) 夏の女兒洋服の作り方. 主婦の友社. 1926
- 10) 冬の女兒洋服の作り方. 主婦の友社. 1927
- 11) 冬の男児洋服の作り方. 主婦の友社. 1927
- 12) 主婦の友社. 主婦之友社の五十年. 主婦の友社. 1967, 39, 77
- 13) 夏の男児洋服の作り方. 主婦の友社. 1926, 巻頭, 6
- 14) 夏の女兒洋服の作り方. 主婦の友社. 1926, 巻頭
- 15) 今和次郎, 吉田謙吉. モデルノロヂオ. 春陽堂. 1930, 3, 121
- 16) “男児洋服に就て必要な心得”. 夏の男児洋服の作り方. 主婦の友社. 1926, 8
- 17) “ロンパースの作り方”. 夏の女兒洋服の作り方. 主婦の友社. 1926, 80
- 18) “要所々々の縫ひ方”. 夏の男児洋服の作り方. 主婦の友社. 1926, 34-39
- 19) “要所々々の縫ひ方”. 夏の女兒洋服の作り方. 主婦の友社. 1926, 28-33
- 20) “部分縫と飾縫”. 冬の女兒洋服の作り方. 主婦の友社. 1927, 34-35
- 21) “必要な部分縫”. 冬の男児洋服の作り方. 主婦の友社. 1927, 29-30
- 22) “ドレスの作り方九種”. 夏の女兒洋服の作り方. 主婦の友社. 1926, 47-49

(2021年10月8日受理)
(2021年11月14日採択)